

## 発刊にあたり(2)

前版の発刊から早 10 年の歳月が過ぎ、約 2 年の準備期間を経て新版として発刊することができました。その 10 年の間に世界は、リーマンショックを発端とする景気の急減速を経験し、さらに日本においては東日本大震災という甚大災害に見舞われ、サプライチェーンの寸断からものづくりの存続が危ぶまれる局面もありました。

では、自動車づくりはこれらの景気減速と同様に停滞したのでしょうか。確かに一時的に生産は滞りましたが、次世代商品、新技術の種まきは続けられ、その萌芽は、電気自動車の普及、そして燃料電池車の市場投入と言う形で実を結びました。これには景気減速局面においても、将来のために必ず商品化するという、設計、実験、そして生産技術エンジニアの心意気があったからだと思います。

今回、編集方針として「できる限り新しい技術について触れること」が掲げられた中での編纂作業であり、当然これらの次世代自動車に付随した新生産技術も網羅すべきと考えました。

一方、まだまだ革新技术の域にあるこれら電動化・新材料の生産技術は各企業間の競争領域であり、ノウハウとして内部に留め置く技術でもあり、この点の開示が今回の改訂作業で一番苦慮した点でした。

とはいえ、本書が各企業の技術者のスキルアップのガイド、ひいてはオールジャパンで技術を発展させることに繋がるということを各企業選出の委員の方々にご理解頂き、執筆者の方々にかなりご無理を申し上げ、可能な限り、新規内容として加筆・修正いただきました。さらに、欧米では新たな軽量化技術を搭載した自動車の販売が開始され、日本としても遅滞なく技術発展を進める必要性から、新素材に関しての記述も加えました。もともと本書は自動車生産技術を網羅的に理解できる完成形に近いものですが、新技術の加筆によって、より時代にマッチしたものとなったと考えます。

本書が、生産技術各分野の技術者の基本書となり、今後 2030 年、2050 年の革新的生産技術につながることを切に願ってやみません。

最後に、非常に広範囲を網羅する本分冊の編纂にあたり、編集委員、各企業、各サプライヤの執筆者の皆様、自動車技術会 生産加工部門委員会の多大なるご協力を賜りました。改めて深く感謝の意を表します。

2016 年 11 月  
生産・品質編 編集委員会  
委員長 日下 高至